星の花が降るころに (3)

安東 みきえ

(夏実との仲直りに失敗した「私」は、戸部君との会話を通じて少し気持ちが楽になりました。)

学校からの帰り、少し回り道をして銀木犀のある公園に立ち寄った。銀木犀は常緑樹だから一年中葉っぱがしげっている。それをきれいに丸く刈り込むので、木の下に入れば丸屋根の部屋のようだ。夏実と私はここが大好きで、二人だけの秘密基地と決めていた。ここにいれば大丈夫、どんなことからも木が守ってくれる。そう信じていられた。

夕方に近くなっても日差しはまだ強い。木の下は陰になってすずしかった。

掃除をしているおばさんが、草むしりの手を休めて話しかけてきた。

「いい木だよねえ、こんな時期は木陰になってくれて。けど春先は、葉っぱが落ちて案外厄介なんだよ、掃除がさ。」

私は首をかしげた。常緑樹は一年中葉っぱがしげっているはずなのに。

「え、葉っぱはずっと落ちないんじゃないんですか。」

「まさか。どんどん古い葉っぱを落っことして、その代わりに新しい葉っぱを生やすんだよ。そりゃそうさ。でなきゃ あんた、いくら木だって生きていけないよ。」

帽子の中の顔は暗くてよくわからなかったけれど、笑った歯だけは白く見えた。おばさんは、よいしょと言って掃除道具を抱えると公園の反対側に歩いていった。

私は真下に立って銀木犀の木を見上げた。

かたむいた陽が葉っぱの間からちらちらと差し、半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。

ポケットからビニール袋を取り出した。花びらは小さく縮んで、もう色がすっかりあせている。

袋の口を開けて、星形の花を土の上にぱらぱらと落とした。

ここでいつかまた夏実と花を拾える日が来るかもしれない。それとも違う誰かと拾うかもしれない。あるいはそんなことはもうしないかもしれない。

どちらだっていい。大丈夫、きっとなんとかやっていける。

私は銀木犀の木の下をくぐって出た。

情景描写

人物の心情を反映した風景や場面の描写を**情景描写**という。本文中では銀木犀の花や木を通して「私」の変化が表現されている。

(例) 星形の花を土の上にぱらぱらと落とした。
私は銀木犀の木の下をくぐって出た。

※お守りのように持っていた銀木犀の花びらを捨て、銀木犀の木の下から出ていく姿から、過去にとらわれずに進もうとするようになった、「私」の変化がわかる。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中には、「私」と夏実の思い出や二人の関係が現在どうなっているかを銀木犀の花の様子を通して表現している一文がある。その一文の最初の五字を答えなさい。

(2) 銀木犀の木の下が「私」と夏実にとってどのような場所であったかを表す言葉を、本文中から九字で探し、書きぬきなさい。

(3) ——線部「私は首をかしげた」とあるが、なぜ「私」は首をかしげたのか。適当なものを選びなさい。

ア 夏実との思い出の木である銀木犀を厄介と言うおばさんに、不満を感じたから。

イ 夏実との思い出の木である銀木犀を見ていたときに話しかけられ、とまどったから。

ウ 銀木犀は常緑樹で葉が落ちないと思っていたのに、銀木犀の葉っぱが落ちると言われたから。

エ 銀木犀は常緑樹で一年中葉がしげっているはずなのに、この木は常緑樹ではないと指摘(してき)されたから。

〔　〕

(4) おばさんとの対話を通じて、「私」はどのように変化したか。適当なものを選びなさい。

ア どんなものからも守ってくれると思っていた銀木犀も古い葉を落とすのだと知り、頼(たよ)りなく感じるようになった。

イ 常緑樹の銀木犀も新しい葉を生やし続けているのだと知り、過去にとらわれず未来に向かって進んでいこうと決意した。

ウ 古い葉の代わりに新しい葉を生やす銀木犀のあり方を知り、夏実と決別し、新たな人間関係を築こうと考えるようになった。

エ 大切に思っていた銀木犀の木も掃除をする人からは厄介な存在なのだと知り、人によって視点が異なることを学んだ。

〔　〕